

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-30

北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会及び国際 日本学シンポジウム「日本のアイデンティ ティ：形成と反響」

鈴木，裕輔

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / 国際日本学論叢

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

133

(終了ページ / End Page)

144

(発行年 / Year)

2011-03-22

平成22年度 国際日本学論叢第8号 2011年3月22日発行 抜刷

学界の動向

北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会及び 国際日本学シンポジウム 「日本のアイデンティティ—形成と反響」

法政大学国際日本学研究所

鈴 村 裕 輔

学界の動向

北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会及び 国際日本学シンポジウム 「日本のアイデンティティ—形成と反響」

法政大学国際日本学研究所

鈴村裕輔

1. はじめに

昨年、筆者は北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会と国際日本学シンポジウム「日本アイデンティティ—形成と反響」という二つの国際会議に参加し、発表を行う機会に恵まれた。そこで、今回は、この二つの国際会議の様子を報告する。

2. 北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会

2.1 開催地と主催校

北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会は、フィンランドのヘルシンキ大学を主催校として行われた。

北欧日本・朝鮮研究協会は正式名称をThe Nordic Association of Japanese and Korean Studiesといい、NAJAKSの略称で親しまれている団体である。NAJAKSはデンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、アイ

七八

北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会及び国際日本学シンポジウム「日本のアイデンティティー形成と反響」

Table 1 Conference of the Nordic Association of Japanese and Korean Studies

Year	Conference	Host University	Nation
1989	1st	University of Copenhagen	Denmark
1992	2nd	University of Tampere	Finland
1995	3rd	Aarhus University	Denmark
1998	4th	Stockholm University	Sweden
2001	5th	University of Oslo	Norway
2004	6th	University of Gothenburg	Sweden
2007	7th	University of Copenhagen	Denmark
2010	8th	University of Helsinki	Finland

スランドの5か国の日本研究者と朝鮮研究者が中心となって1989年に設立された⁽¹⁾。NAJAKSの第1回大会は1989年にデンマークのコペンハーゲン大学を主催校として開かれ、以後、3年ごとに開催されている（Table 1）。フィンランドが開催地となるのは1992年の第2回大会以来2度目、ヘルシンキ大学での開催は初めてとなる。

2.2 大会の概要

今回の大会は、ヘルシンキ大学教養学部の岩竹美加子教授が会頭を務め、8月19日（木）から8月20日（金）にかけて行われた。会場はヘルシンキ大学教養学部が所在する建物メツァタロ（Metsatalo）で、大会期間中の参加者は延べ約120人であった。今回は、1910年の日韓併合から100年が経つことから、“Bridging Japan and Korea”という副題が冠せられた。主催はヘルシンキ大学で、フィンランド学術機関連合（Tieteellisten seurain valtuuskunta）が協賛した。

七七 8月19日に行われた開会式では、主催校を代表してヘルシンキ大学教養学部長のアンナ・マウラネン教授が式辞を述べるとともに、岩竹教授が会頭として歓迎の挨拶を行った。これに続いて、ウォーリック大学（イギリス）のクリストファー・ヒューズ教授が“Still Super-Sizing the DPRK

Threat: Japan's Security Policy and the Korean Peninsula”と題して基調講演を行った。ヒューズ教授は、「1976年から2009年にかけて日本にとって最も脅威となる国がどのように変化したか」と問い、1976年から1993年までは旧ソ連とロシアが、1994年以降は北朝鮮が日本にとって最も脅威となる国である、とした。そして、「日本の安全保障に対する北朝鮮のインパクト」と「何故北朝鮮の動向が日本に対して大きな影響を持つのか」という観点から、日本と北朝鮮、さらには日米韓三国と北朝鮮の関係を分析した。その結果、ヒューズ教授は、北朝鮮は日本にとって本質的な脅威であり、「北朝鮮の脅威」は日米韓三国にとって無限に増殖するかのようであるが、日本の民主党政権は「北朝鮮の脅威」の連鎖から脱却しようとしていない、と指摘した。また、今後、外交交渉の場で日本はより一層の冷徹さを求められるが、民主党は、外交上の態度を明確にすることができない可能性があり、日米韓三国が北朝鮮に対して行動する際に、日本の軍事的役割が高まることも予想される、と指摘して講演を締めくくった。

その後、14時30分からは部門に分かれ、発表が行われた。今回は5種10部門が設けられ、2日間で合計28人が発表した (Table 2)。“Bridging Japan

Table 2 Session, Category, and Chair of Conference

Session	Category	Chair ¹
Session I	Cultural Studies	Mikako Iwatake
Session II	Linguistics	Kim Joung Young
Session III	History	Antti LeppUänen
Session IV	Literature	Miika PUölkki
Session V	History	Mikako Iwatake
Session VI	Literature	Miika Pölkki
Session VII	Social Sciences	Antti Leppänen
Session VIII	Literature	Miika Pölkki
Session IX	Social Sciences	Antti Leppänen
Session X	Literature	Miika Pölkki

¹ Affiliation of all chairs was University of Helsinki.

北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会及び国際日本学シンポジウム「日本のアイデンティティー形成と反響」and Korea” という副題が示すように、28題中9題が日本と朝鮮、韓国ないし北朝鮮の関係を直接の主題としたほか、他の発表の中にも間接的に日本と朝鮮半島の関係を取り扱うものが多く見受けられた。部門によって取り上げる主題に違いはあったが、学際的な取り組みも散見されるなど、日本研究と朝鮮研究の融合した学会としてのNAJAKSの特性が発揮される事例もあった。Cultural Studies部門において、日本政府が2007年に開始した北朝鮮による拉致被害者向けの短波放送「ふるさとの風」を通して日朝関係を分析したヘルシンキ大学のアンティ・シュガヴィツキー氏の発表（論題：Thoughts on ‘Furusato no Kaze’, the Government of Japan’s Radio Broadcast to the Abduction Victims in North Korea）や、History部門において、1905年から1910年における日露関係の中で大韓帝国がどのように位置付けされていたかを検討した東京大学のシュラトフ・ヤロスラブ氏の発表（論題：Korea in Russo-Japanese Relations after the Russo-Japanese War, 1905-1910）などは、その典型であった。

2007年に行われたNAJAKSの第7回大会では、同時代的な研究に比べて歴史的な事象を対象とする研究が多かった⁽²⁾。だが、今回は北朝鮮を巡る問題が国際社会の中で大きな意味を持っているという現状を反映したためか、同時代の出来事を取り扱う研究の数が少なくなかった。また、Social Science部門の倉光佳奈子氏（トゥルク大学）のように、単に研究成果の報告に止まらず、現在の課題に対する提言、指針の提示を行う発表（論題：Low-Skilled Migrant Workers’ Program in Japan and the Relevance of Korean Experience in Dealing with the Similar Program）があったことは、発表者が社会の課題に対して積極的な関係を築こうとする姿勢の表れとして、注目された。

七五

2.3 第8回大会の所感と第9回大会

第8回大会は、91題の報告と延べ350人の参加があった第7回大会⁽³⁾に

比べると、規模が約3割に縮小した。しかし、論題の多様性や社会への関与性という点では、開会式において岩竹教授が指摘したように、相対的に規模の小さな大会となったが、興味深い意義のある発表が多かったと言える。そして、たとえ規模は小さくなったとはいえ、このような特徴的な大会の存在こそが日本研究、朝鮮研究の裾野を広げることに繋がる。まさに、このような点が、NAJAKSが備える意義なのである。

さて、次回の第9回大会は2013年にアイスランドの首都レイキャビクにあるアイスランド大学において、梅沢薫博士を会頭として開催される予定である。北欧における日本研究と朝鮮研究の拠点のひとつであるNAJAKSの活性化は、結果的に外国における日本研究、朝鮮研究の一層の振興をもたらす。それだけに、第9回大会により多くの研究者が参加し、より活発な議論の行われることが期待される。

3. 国際日本学シンポジウム「日本のアイデンティティ—形成と反響」

3.1 開催地、主催者及び協賛者

国際日本学シンポジウム「日本アイデンティティ—形成と反響」は、2010年10月31日(日)から11月2日(火)まで、フランス・アルザス地方のキーンツハイムにあるアルザス欧州日本学研究所(Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA)において行われた。シンポジウムは法政大学国際日本学研究所(Hosei University Research Center for International Japanese Studies: HIJAS)、フランス国立科学センター(Centre national de la recherche scientifique: CNRS)、UMR8155東アジア文明研究所(Centre de recherche sur les civilisations de l'Asie orientale: CRCAO)、ストラスブール・マルク・ブロック大学人文科学部日本学科、CEEJAの5機関が共催し、アルザス地方評議会(Conseil Régional d'Alsace)とオー＝ラン県総評議会(Conseil Général du Haut-Rhin)が協賛した。

北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会及び国際日本学シンポジウム「日本のアイデンティティ形成と反響」

Table 3 History of International Symposium on International Japanese Studies (2005-2010)

Number	Date	Theme	Venue
1st	1st - 3rd December 2005	Japanese Studies: Seen from Europe, Seen from Japan	Maison de la culture du Japon à Paris
2nd	18th - 19th November 2006	International Japanese Studies – Language and What is beyond Language	Hosei University
3rd	22nd - 24th November 2007	Matters Untranslatable	Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace
4th	30th October - 1st November 2008	The Emperor in the Japanese Culture – What is the Emperor ?	Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace
5th	1st - 3rd November 2009	Body as Object	Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace
6th	31st October - 2nd November 2010	Japan's Identity – Formation and Reaction	Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace

Table 4 Timetable

Date	Time	Presenter (Affiliation)
31 October	9:00	Inauguration of Symposium (Sakae MURAKAMI-
	9:30	Hans Dieter OELSCHLEGER (University of Bonn, Germany)
	10:15	Rosa CAROLI (Ca' Foscari University of Venice, Italy)
	11:15	PAI Hyung II (University of California, Santa Barbara, USA)
	13:30	WANG Xiuwen (Dalian City University of Inter-Ethnic Studies, PRC)
	14:15	Josef KREINER (Hosei University, Japan)
	15:15	SUZUMURA Yusuke (Hosei University, Japan)
	16:00	Discussion "Japan's Identity in relation with
1st November	9:00	OGUCHI Masashi (Hosei University, Japan)
	9:45	KOBAYASHI Fumiko (Hosei University, Japan)
	10:45	Annick HORIUCHI (Paris-Diderot University, France)
	11:30	Timon SCREECH (University of London, UK)
	14:00	Josef KYBURZ (UMR8155, France)
	14:45	KAWADA Junzo (Kanagawa University, Japan)
	15:45	Christiane SÉGUY (University of Strasbourg, France)
	16:30	Discussion on the theme of The Shaping of Japan's Identity in
2nd November	9:00	SHIMADA Shingo (Heinrich-Heine-University Duesseldorf, Germany)
	9:45	ABIKO Shin (Hosei Univerisy, Japan)
	10:45	HOSHINO Tsutomu (Hosei University, Japan)
	11:30	Discussion of symposium "Why is Japan preoccupied with

Table 3 に示す通り、国際日本学シンポジウムは2005年に「日本学とは何か—ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究」と題して行われて以降、毎年1回ずつ行われ、開催地は第1回がパリ日本文化会館、第2回が法政大学で、2007年の第3回からはCEEJAとなっている。

3.2 シンポジウムの概要

シンポジウムでは、日本側から8名、欧州側から8名の、合計16名が報告を行った。各報告者の論題をTable 4に示した。

国際日本学シンポジウムは毎年統一の主題を設けて報告を行う。今回の

of Symposium

Title	Language(s)
GIROUX, Josef KYBURZ, and Shin ABIKO)	
Ethnology, Colonialism and National Identity in Japan: Some Remarks on Their Systemic Relationship	English
Identities in Conflict: 'Okinawa' in Yanagita Kunio and Iha Fuyū's discourses	English
Photography and Travel Guides to Chosen: Imperialists Nostalgia and Representations of the 'Conquered Other'	English
Masculinization of China-born Tango no Sekku in Japan	Japanese
The contribution of ethnology and folklore studies to the question of Japan's identity	Japanese
Ishibashi Tanzan's 'Small Japan Policy' and his notion of Japan in the interwar period	English
neighbouring cultures" (Moderator: Josef KREINER)	
On the Origin and the Meaning of the Name "Nippon or Hinomoto"	Japanese
Japan qualified as a country of 'mildness'	Japanese
Construction d'un imaginaire national à Nagasaki au tournant du XVIIIe siècle - à travers les écrits de Nishikawa Joken (1648-1724)	French
Bones and Japanese Identity	English
From Aizawa Seishisai's vision of Christianity to State Shinto	English
The Restoration of Meiji: An Invented Return	Japanese
Press and State Identity in Early Meiji Japan	French/Japanese
Response to Foreign Influence (Moderator: Timon SCREECH)	
Narrative Construction of Identity	Japanese
Nishi Amane's "Encyclopedia" and Japan as a horizon	Japanese
Identity of Japan, located on the periphery of the world	Japanese
the question of its identity?" (Moderator: ABIKO Shin)	

北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会及び国際日本学シンポジウム「日本のアイデンティティ形成と反響」

主題は「日本のアイデンティティ形成と反響」であり、「日本とは何か」という「日本という国やそこに住む人々の独自性や本質」にかかる問題が、日本の政治、歴史、文化、社会などを通して検討された。

今回の16人による報告は、「日本という国やそこに住む人々の独自性や本質」としての「アイデンティティ」の内実を対象とする発表と、「アイデンティティ」の形成の過程を取り扱う発表とに大別することができる。もちろん、「日本のアイデンティティ」の内容を扱う際に「日本のアイデンティティがいかにか形成されたか」という点から迫る報告があり、形成の過程を解明することが「日本のアイデンティティ」の内容と特徴を明らかにすることに繋がるため、両者の区分けは便宜的なものとなる。この点を踏まえた上で16人の報告を分類すると、前者が9報、後者が7報であった。各報告者の具体的な内容を発表の順番に従って概観すると、以下の通りとなる。

「日本のアイデンティティ」の内実を取り扱ったのは、次の9報である。

- (1) 中国を起源とする端午の節句が日本に導入され、どのような独特の発展を遂げたかを検討した王秀文氏の「端午の節句の変容：中国的から日本的へ、女性的から男性的への転換」
- (2) 第一次世界大戦から日中戦争に至るいわゆる戦間期における石橋湛山の「小日本主義」の背景と構造を議論した、筆者による発表 “Ishibashi Tanzan’s ‘Small Japan Policy’ and his notion of Japan in the interwar period”
- (3) 古代から中世にかけての「日本」という国号に対する朝廷や知識人の考えの推移と問題点を実証的に検討した、小口雅史氏の「国号「日本」(にっぽん)「日の本」(ひのもと)の成立とその意味」
- (4) 中世から近世にかけて、日本に住む人々が日本という国を「和らぐ国」として理解していた、という事実から、近代以前における日本人の自己認識のあり方に迫った小林ふみ子氏の「「和らぐ国」というアイデンティティ」

- (5) 『日本水土考』の記述を通して、「アジアは五大州の第一位、日本はアジアの第一位、京都は日本の第一位」という西川如見の日本観を検討した、アニック・ホリウチ氏の“Construction d'un imaginaire national a Nagasaki au tournant du XVIIIe siecle - a travers les ecrits de Nishikawa Joken (1648-1724)”
- (6) 『解体新書』は、自分の体の構造、人間の体の構造を知るという点で「汝自身を知れ」という西洋の解剖学の持つ本質的な訴えかけを日本に伝えたとするタイモン・スクリーチ氏の“Bones and Japanese Identity”
- (7) 明治時代になって生み出された国家神道が、「日本古来の伝統の強調」を取りながら、組織や普及の方法などの点で西洋的な仕組みに完全に依存していたことを指摘した、ジョセフ・キブルツ氏の“From Aizawa Seishisai's vision of Christianity to State Shinto”
- (8) 明治時代になって体系的に導入された「哲学」がギリシアに由来する philosophy とどのように異なっていたのかを、西周に即して検討した安孫子信氏の「西周の『百学連環』と日本という地平」
- (9) 「日本」という国の自己規定と、「日本」が目指すべき方向性を、「日本人」として探求する試みとしての丸山眞男の古層論を手掛かりとして、「周縁としての日本のアイデンティティ」を論じた星野勉氏の「『周縁』日本の「アイデンティティ」

一方、「日本のアイデンティティ」の形成の過程を取り扱ったのは、次の7報である。

- (1) 民族学と民俗学が、日本の植民地経営と国家ないし国民のアイデンティティ形成との間で不可分の関係にあったことを論じた、ハンス・ディーター・オイルシュレーガー氏の“Ethnology, Colonialism and National Identity in Japan: Some Remarks on Their Systemic Relationship”
- (2) 伊波普猷による沖縄学の確立と「沖縄のアイデンティティ」の形成の相

北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会及び国際日本学シンポジウム「日本のアイデンティティ形成と反響」

相互作用を通して、柳田国男における「日本のアイデンティティ」の模索の意味を問うたローサ・カーロリ氏の“Identities in Conflict: ‘Okinawa’ in Yanagita Kunio and Iha Fuyu’s discourses”

- (3) 「日韓併合」によって日本の植民地となった朝鮮において、観光産業がとりわけ宣伝、広報活動を通じて、日本と朝鮮を結び付ける「アイデンティティ」の形成にどのような力を発揮していたかを論じたパイ・ヒュンイル氏の“Photography and Travel Guides to Chosen: Imperialists Nostalgia and Representations of the ‘Conquered Other’”
- (4) 日本における民俗学と民族学が、「日本のアイデンティティ形成」とどのように関係したかを歴史的展開に基づいて検証したヨーゼフ・クライナー氏の「民族学・文化人類学と民俗学の日本のアイデンティティ形成への貢献」
- (5) 楠木正成や赤穂義士の故事や逸話を通して「establishmentには反逆したが、あくまで自らの主君に対しては忠誠を誓う」という人間像を肯定した明治政府の態度を明らかにした川田順造氏の「明治維新：発明された「復古」」
- (6) メディアを通さずに直接民衆を統治することで中央集権をなし得た江戸幕府と、民間の新聞を通して国家アイデンティティの形成とプロパガンダを行った所期の明治政府の対比を行ったクリスティアーヌ・セギー氏の“Press and State Identity in Early Meiji Japan”
- (7) 書籍や雑誌によって国民国家という物語の中に個人を組み込む過程と手法を通してアイデンティティの問題に向き合った島田信吾氏の「物語性によるアイデンティティの構築」

六
九

以上のような議論を受け、シンポジウム最終日には総括討議“Why is Japan preoccupied with the question of its identity?”が行われた。その中では、「アイデンティティの問題を解明するためには文化変容の手法を用

いることも重要である」といった指摘がなされるなど、「日本のアイデンティティ」を明らかにする上で、今後の方向性が示された。

3.3 シンポジウムの所感

国際日本学シンポジウム「日本アイデンティティ形成と反響」は、会期中の参加者数が延べ70人という点からすれば、決して規模の大きな集まりではない。しかし、日本研究の第一線で活動する日欧の研究者が集まり、CEEJAにおいて会議ばかりでなく寝食をともにするという事は、参加人数の多寡以上に大きな意味をもっていると言えるだろう。また、このようなあり方によって研究上の、あるいは人的な側面での連携が生まれ、強化されるとするなら、その点にこそ、まさに国際日本学シンポジウムの本質的な意義が存すると言えよう。

4. おわりに

物事を評価する上で難しいのは、「前人未到の快挙」ではなく、「出来て当たり前と思われていること」であろう。何故なら、前者の評価が簡単なのは、それ以外に比較する対象がないためで、いわば絶対値での評価が可能だからである。しかし、後者の場合、「出来て当たり前」という考えが前提されているため、たとえその実現のために無数の障害があるとしても、あまりに日常的な行為のために解決するのが当然のことと見なされがちになってしまう。ここに、評価をする際の根本的な難しさが生ずるのである。

このような一般論を国際会議の場面に応用するとどうなるか。「会議の円滑な進行」こそ、「出来て当たり前と思われていること」となるだろう。その意味で、極めて円滑に進行し、あたかもそれが当然かのように会期が終了したNAJAKSの第8回大会も国際日本学シンポジウムも、「出来て当

北欧日本・朝鮮研究協会第8回大会及び国際日本学シンポジウム「日本のアイデンティティー形成と反響」

たり前と思われていること」が遂行された。そして、当然ながら、そのためには会議の運営に携わる人々の苦労が大きな役割を果たしたのである。

すなわち、NAJAKS第8回大会においては、各部門の座長を兼務しながら大会の運営の任に当たったヘルシンキ大学のアンティ・レツパネン氏、ミッカ・ポレッキ氏、ミーカ・ポルッキ氏、国際日本学シンポジウムにおいては、CEEJAのセシル・ディディエジャン氏、マガリ・ブーニュ氏の献身的な協力が、会議の成功にとって不可欠な要素であった。

NAJAKSの第8回大会も国際日本学シンポジウムも大過なく幕を下ろしたのは、上掲の各位の力添えがあったからであり、ここに、改めて深甚なる謝意を表するものである。

註

- (1) 鈴村裕輔 2008年 「The Nordic Association of Japanese and Korean Studies 第七回大会」『国際日本学論叢』 第5号、116頁。
- (2) 同、118頁。
- (3) 同、117頁。